

未来への記憶を呼び覚ます…  
文画人・堤檜次郎が記録した  
大正・昭和の水都・大阪の眺めから

CEL/U-CoRoプロジェクト「上町台地 今昔タイムズ」  
の取材を入りに、地域のみなさまからの学びを通して

第191回「河川文化を語る会」 2016.11.30

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所:略称CEL

特任研究員 弘本由香里

# 本日のお話の流れ(目次)

- I : 本日のテーマを選んだ経緯など  
CELの研究・活動との関係から
- II : 大大阪のフロンティアへのまなざし  
記録画家・堤檜次郎が登場した時代とは
- III : 堤檜次郎の画業と作品に宿るメッセージ  
上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶
- IV : おわりに  
未来への記憶を呼び覚ます

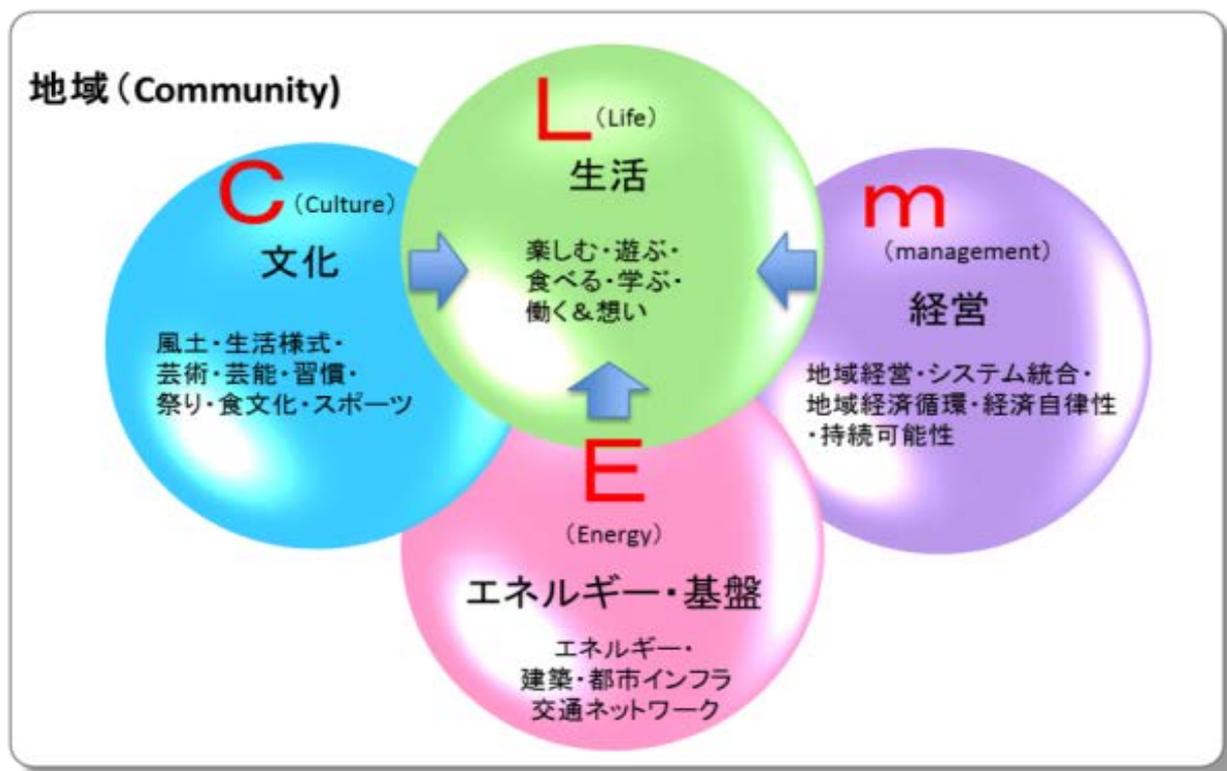
## I : 本日のテーマを選んだ経緯など

CELの研究・活動との関係から

# エネルギー・文化研究所(CEL)の研究・活動の特徴

- CEL=大阪ガス エネルギー・文化研究所の研究・活動  
⇒ 生活者の視点で、持続可能な住まい・暮らし・まちづくりへアプローチ

## 【研究・活動の展開イメージ】



## 【研究・活動の特徴】

- ・長期的な視点でテーマ設定
- ・社会そのもののあり方に着目
- ・理論と実践を両輪とする
- ・社外の多様なセクターとの協働

# 自己紹介：住まい・まちづくりとの関わりの歩み

- ①雑誌『新住宅』の編集に携わり、住まい・まちづくりの世界へ
- ②CEL(カルチャー、エネルギー、ライフ)の研究・活動  
⇒ 持続可能な住まい・暮らし・まちづくりへアプローチする  
生活者の視点
- ③大阪市立住まい情報センター&住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)開設への関わり  
⇒ 住むまち・大阪の歴史の再評価と再生 ⇒ 都市居住  
文化の再構築への視点
- ④大阪・上町台地をフィールドとしたまちづくりへの関わり  
⇒ 地域資源とコミュニティ・デザインの視点
- ⑤実験集合住宅NEXT21第3フェーズでの地域コミュニケーションデザイン  
実験(U-CoRoプロジェクト)の展開
- ⑥同志社大学とCELによる「コミュニティ・デザイン論」講座の開設と出版
- ⑦生活者の視点、コミュニティ・デザインの視点から、住宅まちづくり審議会  
、文化振興審議会、河川整備委員会等への参加  
など

# 地域資源とコミュニティ・デザインへの着目

## 課題

- ・ アイデンティティの形成を支える基盤の再生
- ・ いのちの連続性を実感できる基盤の再生
- ・ 多世代・多文化間コミュニケーションを媒介できる基盤の再生
- ・ 地域・社会の知恵の継承・共有を担保する基盤の再生

## 地域資源の活用

- ・ 地域の自然・環境との“つながり”
- ・ 地域に暮らす多様な人との“つながり”
- ・ 地域の歴史・生活文化との“つながり”

“地域資源”とは、地域の特性を物語る、自然、建築・街並み、生業、産物、人・組織、祭事、風習など

## 目的

地域資源を媒介に、人と人、人と地域の時間的・空間的“つながり”を重層的に紡ぎ、いのちと暮らしの基盤の再生

## フィールド・トライアル

大阪・上町台地界隈をフィールドに、地域資源を活かしたコミュニティ・デザインの試みへ

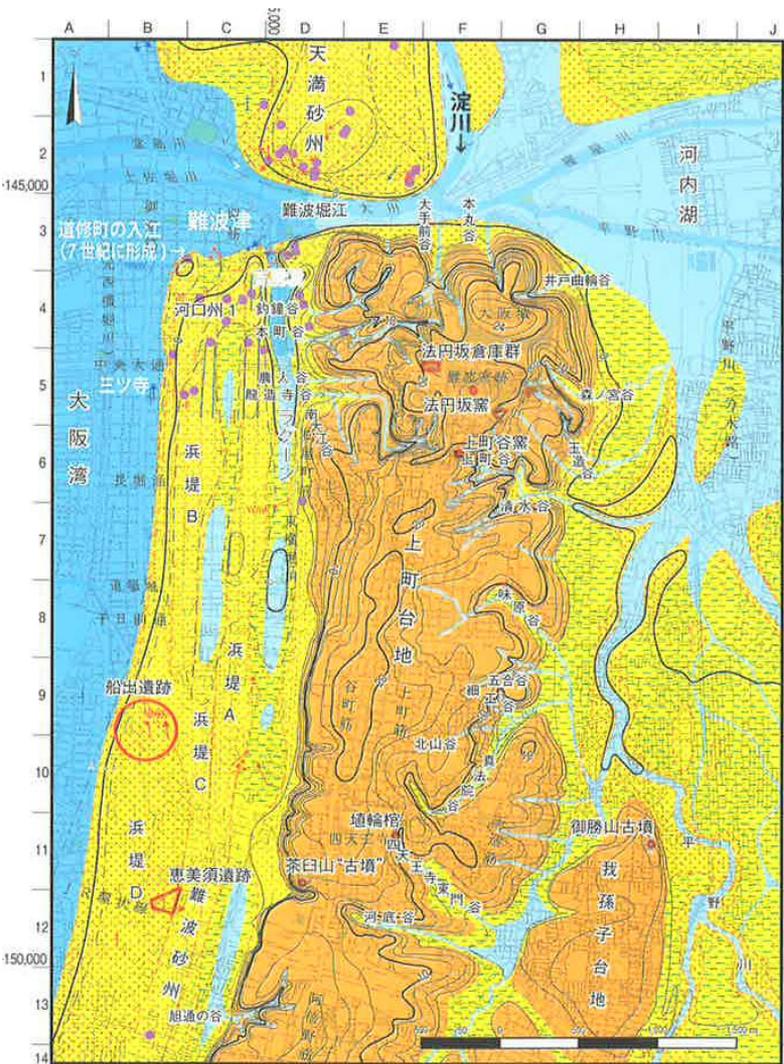
# 実践フィールド：上町台地の地形・地理



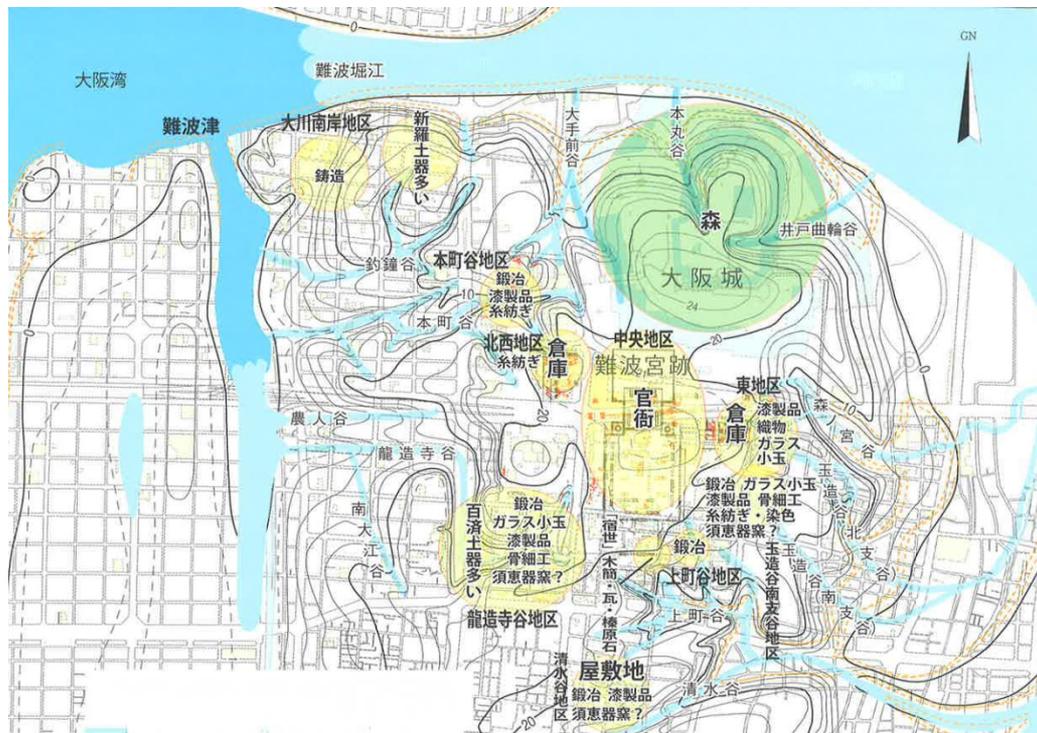
- ・ 大阪市中心部、大阪城から南へ延びる高台(かつて東・西は海)、大阪の歴史の原点
- ・ 台地の履歴とともに、宗教、教育、文化、医療、福祉、緑地等の資源が集積
- ・ 現在、都心居住エリアとして人気を集める

参考:

# 古代・上町台地のランドスケープ：水都・大阪の原点



6世紀 上町台地古地理図(『大阪上町台地の総合的研究』)※出典右記資料



上町台地北部の6世紀から7世紀前半の様子(水の豊富な谷々で多彩なものづくりが行なわれていた) ※出典下記資料

出典:大阪歴史博物館特別企画展 2016.7.16~8.29  
「都市大阪の起源を探る 難波宮前夜の王権と都市」展覧  
会パンフレットから

# 上町台地の現在： 地域の履歴・特徴の例

大阪城築城からの歴史があるが、戦前の住商混在のまちは戦災で消失

戦後は、官公庁や学校が集積するとともに、問屋街、オフィス街に

近年、利便性の高い都心立地でマンションが増加

江戸期から市街化され、戦災も免れたため、路地と長屋の街並みが残っている

長屋の再生・活用の取り組みも広がりを見せる

一方で、近年マンション建設が進みまちの姿が変わりつつある

大正・昭和初期から市街化が進み、戦後は病院群と住商工が混在する下町として発展

大阪赤十字病院や府営住宅の建替えにともなう再開発で、大規模マンションが林立するまちへ大きく変貌し、人口が5倍以上に急増

大正期は、村が点在する田園地帯。昭和初期から、平野川改修工事や中小工場の立地が進み市街化。在日コリアンの移住・集住も進んだ

近年、多文化共生のまちづくりが活発に取り組まれている

明治期までは、小さな集落が散在する郊外地。学校や病院の立地とともに、戸建て住宅地、文教住宅地として発展

近年マンション建設が進み、人口が急増、子育て世代が大量に流入している



# 上町台地の現在： 集積する地域資源(例)

The central map shows the Uemachi Plateau area in Osaka, with several key locations and resources highlighted by colored circles and lines:

- 大阪城** (Osaka Castle): Located at the top of the map.
- 難波宮** (Naniwa Palace): Located in the upper middle section.
- 玉造** (Tamazoe): A green circle highlighting a specific area.
- 伝統野菜** (Traditional Vegetables): A green circle highlighting a resource.
- 町家・長屋** (Machiya/Ryūkyū): A red circle highlighting traditional townhouses.
- 空堀** (Uraji): A red dashed circle highlighting an area.
- 実験集合住宅** (Experimental Collective Housing): A red circle highlighting a housing project.
- NEXT21**: A red circle highlighting a specific initiative or area.
- 下寺町逢阪** (Shimojiro-ji Aiwake): A blue dashed circle highlighting an area.
- 寺院・神社** (Temple/Shrine): A blue circle highlighting religious sites.
- 四天王寺** (Shitennō-ji): A blue circle highlighting a specific temple.
- コリアタウン** (Koreatown): A red dashed circle highlighting a cultural district.
- 多文化** (Multicultural): An orange circle highlighting a resource.
- 釜ヶ崎** (Kamagasaki): A black dashed circle highlighting an area.

Surrounding the map are several photographs illustrating these resources:

- Top left: A street scene with people holding colorful umbrellas.
- Top middle: A traditional Japanese building with a tiled roof.
- Top right: A festival scene with people in traditional attire and a large green vegetable prop.
- Middle right: A modern building with a large tree in front, labeled **ゲストハウス** (Guest House).
- Middle left: A row of traditional wooden townhouses.
- Bottom left: A street scene with people walking past a building with colorful murals.
- Bottom left: A traditional Japanese shrine building.
- Bottom right: A festival scene with people playing large drums.
- Bottom right: A street scene with a building labeled **コリアタウン** (Koreatown).
- Bottom right: A festival scene with people playing large drums.

A legend at the bottom right of the map indicates symbols for:

- 学校 (School)
- 寺院 (Temple)
- 神社 (Shrine)
- 公園 (Park)
- 神社 (Shrine)
- 神社 (Shrine)

# 地域資源を活かした関係性の再編: U-CoRoプロジェクトStep1

## ■ 地域資源を活かしたウィンドウ展示を核に U-CoRoプロジェクト第1ステップ(2007-2012)

手法・狙い

- 4つの基本テーマを軸にコンテンツを構成、ウィンドウ展示と関連するワークショップ・交流イベント等のプログラムを展開
- 地域の物語としてのコンテンツへの関わりを、人と人、人と地域の“つながり”を育むプロセスとしていく

実験集合住宅NEXT21



多様なプレイヤー



資源・ネットワークの発見・活用・再編

地域力

- 地域に暮らす自覚と愛着を育む力
- 災害リスクに思いを馳せて備える力
- 子どもの育ちを支える力
- 単身世帯や高齢者の孤立を防ぐ力
- マイノリティを包摂する力
- 過去に学び未来を思う力

地域を越えた智恵の共有

都市居住の基盤の再生

- 長屋の集積地 +
- 寺社の集積地 +
- 文教住宅コミュニティ +
- マイノリティ集住地 +
- 都心のマンション +

- 15のコンテンツ中 4 件、「減災文化の創造」をテーマとしたコンテンツの埋め込み
- 15のコンテンツ中 1 件、台地周辺の「水脈」をテーマとしたコンテンツの埋め込み

# U-CoRo Step1:

## ウィンドウ展示vol.14で水脈をテーマに「上町台地・水先案内」

※の展示は期間を若干延長しました。



上町台地まつり絵巻

2007.2.5mon-2007.4.28sat



上町台地 子どもと遊び  
いま・むかし

2007.5.14mon-2007.8.31fri



「いのちをまもる智恵」を伝える  
減災に挑む30の風景と上町台地災害史

2007.9.3mon-2007.12.28fri ※



緑と鳥の回廊、上町台地

2008.1.21mon-2008.5.9fri ※



上町台地と  
なにわ伝統野菜物語

2008.5.19mon-2008.8.29fri ※



減災ゲームで気づく  
上町台地の暮らしいろいろ

2008.9.16tue-2009.1.23fri



春の日 上町台地で読みたい本

2009.1.26mon-2009.5.22fri



上町台地 玉造黒門越瓜栽培  
“ツルつなぎ”プロジェクト

2009.5.25mon-2009.9.4fri



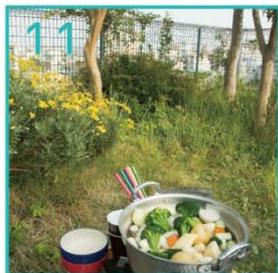
“減災キャラバンon上町台地”  
の道程から

2009.9.7mon-2010.1.29fri



まちで育む上町台地の子

2010.2.1mon-2010.5.28fri



日常の楽園 上町台地  
コミュニティグリーン紀行

2010.6.1tue-2010.9.10fri



上町台地 もしも・いつもの  
“避難所”ウォッチング

2010.9.13mon-2011.1.28fri



上町台地 まちなかの  
プロフェッショナル

2011.2.1Tue-2011.6.30Thu



上町台地・水先案内

2011.7.4mon-2011.11.11fri



U-CoRo 人絵巻  
～上町台地百人一句

2011.11.14mon-2012.3.31fri

vol.14 で水の恵みとリスクを分かち合ってきたまちの記憶をたどった

# U-CoRo Step1:

## 「上町台地・水先案内」の取材で幻の川めぐりへ

失われた水辺の記憶の痕跡をたどり、見えない風景に思いを馳せる

### 上町台地 幻の川めぐり

「猫間川を散策しましょう」そう誘われ、即答した。「何もないから面白くないですよ〜」。ところが散策当日、その先入観が音を立てて崩れていった。ええ歳の男女4人が、古地図を片手に街をキョロキョロ、時にはマンホールをさき込み、地元の人からすれば「変な人」以外の称ででもない30分間のショートトリップ。種かに得もない。しかし、何もないところから川川があったことの片鱗を見つけた時は、山根徳太郎の気持ちがわがわが気がした(大塚敏)。

(※)麓京宮の研究を行い、大塚敏を研究した人物。



JRの森ノ宮駅東口を北進して、猫間川の名を残す施設に至る



古い地図を手にもって再び南へ



東小橋公園にある猫間川のモニメント



鶴橋の国際市場の中、川が流れていたところは不明

玉造の二軒茶屋付近に、昔、猫間川に架かる石橋・黒門橋があったという



マンホールの下を流れる水管を覗く

鶴橋の商店街でお店の人に取材



川の名にちなんだ鍼灸院も

電柱の表示にネコマガ発見



「前の道が猫間川跡ですよ」と内原さん

JR大塚線の高架橋に今も猫間川の名が残る

猫間川にかつて実在した橋の名を残す交差点

そして、川筋はさらに南に続く!?

### 上町台地 幻の川めぐり

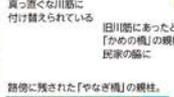


玉津橋の欄干にある古地図で平野川の旧川筋を確認



**足代健二郎(郷土史家)**  
上町台地の裾野、生野区西部をかつて船のように曲がりくねりながら北流していた旧平野川は、濃い音には古清川と呼ばれていたという。この川筋は大正時代に直線状に付け替えられた。新平野川とも平野瀬河とも呼ばれる。市街地の中のただの水路に変貌した。

かつての古清川の流域「百済野」の地は、新田徳夫(歌人・新選組)が多くの歌に詠んだのどかな田舎地帯であった。その古い流路の跡は今でも所々に風情を残している。



丸一橋から南の平野川は、真っ直ぐな川筋に付け替えられている



旧川筋にあつたという「かめの橋」の欄干が邸家の欄干



路筋に残された「やなぎ橋」の欄干



旧平野川の土手にあつたという船白大神、鳥居脇には「船木橋」の欄干



江戸時代の初期に平野川(平)に並べられたという灯明柱が今も豊平天神宮に残る



「日本書紀」に徳天皇が架けたとあり、記録に残る日本最古の橋「つるのはし」



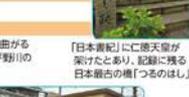
なだらかに曲がる車道は旧平野川の土手道



近く「百済野」が実在したという西彼地稲宮



「前の道が猫間川跡ですよ」と内原さん



そして、川筋はさらに南に続く!?

### 上町台地 水先“地理”案内

「水都」といえば、だれもが思うのは中之島あたりや道頓堀など、上町台地の西側。しかし、台地上や台地東側にも「水都」だった名残があちこちにあります。地形をたどって、台地やその東手にも、まちなかの水遊びへ出かけてみてください。

今回の「猫間川」取材のコース (必ずしも旧川筋ではありません)

今回の「旧平野川」取材のコース (必ずしも旧川筋ではありません)

**猫間川**  
〜今も足下を流れる、知られざる川  
猫間川は上町台地のすぐ東、JR大塚線が線沿いを北流する小川川です。清水谷や鶴工橋、橋谷といった台地東部窪地の谷の流れて、すべて猫間川に集まっています。古地図の川筋をたどれば、両側野区文の里付近まで遡れます。豊田大塚城では築城構想として防衛ラインの役目も果たしていました。現在は湖東化され、地上部は道路になっています。川の名の由来も遺棄化の時期もよく分からない不思議な川は、今も人知れず、北流しています。

**平野川**  
〜悠久の時を刻む、なわの小大川  
現在の平野川は、船原市内で大和川から分派し、八尾港や平野郷のそばを過ぎ、生野区林寺6丁目付近から北流する。流路延長17.4kmの川です。大和川付け替え前は、JR八尾駅付近で、旧大和川から分かれていたようです。生野区内では大正期に河道の直線化が進み、昭和38(1963)年には東に1kmほどのところを南に北流する。平野川分水路も設けられました。近年、川と再び親れようとする人々と、新たな歴史を刻みはじめています。

案内人・足代健二郎氏を通して、堤檜次郎作品に出会う

## U-CoRo Step2:

# 過去・現在・未来をつなぐ、「上町台地 今昔タイムズ」の発行へ

■U-CoRo Step1で築いたネットワークとコンテンツを礎にStep2へ展開 (2013年～)

## U-CoRo Step 1



ウィンドウ展示vol.1～15

## U-CoRo Step 2



「上町台地 今昔タイムズ」発行

- ・過去と現在を行き来しながら、未来を考える壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を発行
- ・街角のコミュニケーション・ツールとして、顔の見えるコミュニケーションを促進
- ・個人の体験・記憶と、都市の歴史資料をつなぎ、地域の智恵として共有する
- ・自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方
- ・身近な暮らしのなかにある歴史を共有し、将来につながる種とする試み

# 「上町台地 今昔タイムズ」: 資料と記憶からまちを見つめ直す

## vol.4 で文画人・堤檜次郎が記録した水辺の風景と土地の記憶にフォーカス

上町台地 今昔タイムズ

1914(大正3)年

鉄道史から垣間見える  
近現代・大阪での都市拡大

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

上町台地 今昔タイムズ

2015(平成27)年

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

上町台地 今昔タイムズ

2015(平成27)年

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

水辺から大正・昭和の大阪を描く

文画人・堤檜次郎が見つけた大阪

上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶

上町台地 今昔タイムズ

2014(平成26)年

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

浪花の町衆が親しんできた  
近郊の豊かな自然と雄大な景観

上町台地 今昔タイムズ

2016(平成28)年

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

昔も今もなにわ老物  
「玉造黒門越瓜」物語

上町台地 今昔タイムズ

2014(平成26)年

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

百貨店・商店街との  
思い出から垣間見るの  
暮らしとつながりの変化

上町台地 今昔タイムズ

2017(平成29)年

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

■大正時代の大阪の発展

伝説の生玉入形と  
文化の原風景

…私たちが暮らす“上町台地”。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。…

## Ⅱ： 大大阪のフロンティアへのまなざし

記録画家・堤樽次郎が登場した時代とは

## 2015年：「大大阪」誕生から90年を経て

- 2015年は、大阪にとって幾重にもシンボリックな年となった。
- 「戦後70年」は言うまでもないが、奇しくも「大坂城落城400年」、「道頓堀開削400年」。
- さらに大阪市が面積・人口ともに全国最大となった大正末期の「大大阪誕生90年」にも当たった。
- 特定の周年のみに価値があるわけではないが、それを機に日常的に歴史を振り返って考える視点を得ることができるならば、シンボルイヤーも無駄にはならない。
- 『上町台地 今昔タイムズ』では、2013年から2015年にかけて、都市の将来に向けて、「大大阪」に関連する題材を取り上げてきた。

## 近世大坂と近代大阪の境目：「大大阪」の時代

- 明治22(1889)年の大阪市制施行時、15.27km<sup>2</sup>だった市域は、大正14(1925)年の第二次市域拡張で181.68km<sup>2</sup>に一気に広がり、当初の約12倍近く、現市域の大半を編入した。
- 市制施行時の人口は47万人だが、第二次市域拡張で当初の約4.5倍の211万人に達し、面積・人口とも全国最大と都市となり、「大大阪」と呼ばれた(昭和7年10月には東京が最大に)。
- 大阪のまちは、近世に築き上げられた大坂三郷(北・南・天満)を核としつつ、明治後期から周辺地域を急速に合併・開発し、近代化のスピードとともに拡張していった二重構造を宿している。
- 「大大阪」時代を振り返る営みは、将来に向けて自らの都市としての特性をとらえ直す機会となる。



# 都市拡大のプロセスをリアルにとらえる

- 近代工業の受け皿となった工場と労働者の住まいや盛り場は、近世大坂の周縁部に集積し、交通網の整備や河川改修等に呼応しながら、さらに外側へと広がっていった。
- まちはずれの駅の誕生から、徐々に市街地への侵入、郊外への延伸とともに、果てしなく拡張していった市街地の変遷のプロセスを、リアルな記憶として共有する「上町台地 今昔タイムズ」の試み。
- 「大大阪」の誕生前後に起きた現象は、反転して見れば周辺に広がる数々の村の消失、豊かな田園地帯の市街地化という出来事でもあった。
- 失われた村々や田園は、どんな姿をしていたのか。人々はどんな思いを抱え、変わりゆく風土と対話していたのだろうか。問いが立ち上がってくる。

# 刻々と都市化の波が押し寄せる：台地の東側の眺め

田園地帯から工場と長屋が建ち並ぶまちへ急変



大正13(1924)年撮影の航空写真、左は玉造駅周辺、右は舍利寺村・田島村付近(大阪城天守閣蔵)

…まさに「大大阪」誕生前後のまちと村々の変化の渦中に生き、記録に努めた人物がいました。明治・大正・昭和を生き、稀有な記録画家・堤 樽次郎です。近世の名残をとどめていた明治の大阪が、大正から昭和へと、一気に拡大していった時代を、日本画と文で誠実に記録しています。そのまなざしを手掛かりに、未来への記憶を呼び覚ましましょう。…

## Ⅲ：堤檜次郎の画業と作品に宿るメッセージ

上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶



## 注記)

- 『上町台地 今昔タイムズ』に掲載の堤檜次郎氏の作品は、『鶴橋猪飼野画集-文画人・堤檜次郎が描いた大正・昭和時代の鶴橋・猪飼野の世界』(小野賢一、2011年)、『日本画家・堤檜次郎が描く大正・昭和時代の水都・大阪-川から眺めた街』(小野賢一、2013年)に収録されたもののなかから、上町台地の東西の印象的な風景が描かれたものを選んでいきます。
- 作品の掲載については、作品継承者(直系の孫)・堤條治氏のご承諾を得ています。
- 作品のタイトル・時期、描かれた場所や時代についての解説等は、堤檜次郎本人が書き残した説明書きや調査をもとに、猪飼野探訪会の足代健二郎氏・小野賢一氏が中心となってまとめられた研究成果(上記文献等)によるものです。
- 文中、堤檜次郎氏の敬称は略しています。



小野賢一氏



足代健二郎氏



堤條治氏(右端)

写真は、上町台地 今昔フォーラムvol.4(2015年9月12日、大阪ガスエネルギー・文化研究所主催)より

# 記録画家・堤楷次郎の歩み (前述・注記資料から)



22歳頃



71歳頃(自画像)



同人達と(右端)

- 明治29(1896)年、大阪・旧鶴橋村味原池近く(現天王寺区味原あたり)に生まれる。
- 大正4(1915)年、大阪画壇で評価を得、大阪・高島屋美術部に勤務。この頃から鶴橋・猪飼野と周辺の風景を、精力的に描き始める。
- 20代で旧鶴橋町猪飼野(現東成区玉津)に移り住み、当時の大阪の画壇の大家、山口艸平や久保井翠桐に師事。号は梨雪。
- 24~5歳頃に書道家のアサコと結婚。
- 1930年代から旧鶴橋村木野(現生野区桃谷)で印刷業を営む。
- 戦後は、牧村史陽の佳陽会に入会。郷土史研究とともに、「大阪百選」「鶴橋、猪飼野5部作」等を描く。
- 昭和58(1983)年、87歳で永眠。
- 大正から昭和にかけ、激変する大阪のまちと暮らしの記録に力を注いで、400点に上る貴重な作品を後世に残した。とりわけ、生まれ育った地へのまなざしはあたたかい。

## 水辺から大正・昭和の大阪を描く

- 東には河内平野に実りを運んだ川とため池の数々が、西には城下町の賑わいを支えた堀川が、上町台地の輪郭を際立たせ、大阪の発展を支えてきた。
- 檜次郎の作品で注目したいのは、「大大阪」と呼ばれた時代の表面の華やぎにスポットを当ててではなく、むしろその繁栄を下支えしている生業や交通のありようや、発展の一方で失われていく身近な風景こそ、描き留めるべき対象と定めているところ。
- 激変するまちの風景の最前線が、上町台地を挟んで、水都・大阪のそこここに広がっていた。
- 檜次郎が描いた水辺の風景から、移り変わっていく時代の空気まで伝わってくるよう。

『上町台地 今昔タイムズ』vol.4(2015年春・夏号)から

## 「月」〈大正7(1918)年〉

東区大川町(現在の北浜4丁目あたり)のビルの屋上から描かれた絵と思われます。この付近は当時、大阪の金融・商業の中心地として栄えていたところ。瓦屋根の商家が建ち並ぶ中に、洋風の住友本家の建物も見られます。

## 「淀屋橋南詰」〈大正5(1916)年〉

市電の開通にともない淀屋橋は赤い鉄橋に架け替えられました。左上に見えるのは日本銀行で、右上の赤い鉄柱は「仁丹」のイルミネーション。

## 「東横堀丸町の浜にて」〈大正4(1915)年〉

東横堀川の「本町の曲がり」付近を描いたもの。このあたりの川の両側には染め物屋(捺染工場)が並んでいました。川で染め布を洗い、風が干場の染め布をなびかせる光景は、初夏の水都の風物詩だったそうです。

## 「明治晩年の小橋乃付近」

画面の右下を走る城東船の蒸気機関車。右が北で、上町台地東側の小橋付近が俯瞰で描かれています。堤檜次郎が生まれたのはこの近く。産湯稻荷神社の北には味原池がまだありました。「桃山」「桃谷」などの地名とゆかりある桃畑のほか、茶畑や梅畑、草地などが広がっていた様子も描かれています。

## 「大阪工廠(城東練兵場にて)」〈昭和4(1929)年〉

戦前までは、大阪城の周辺一帯には、大阪砲兵工廠と呼ばれる一大軍事工場群が広がっていました。檜次郎は川向うの工場群を練兵場の方から描いたようです。

## 台地の東に広がる沃野と暮らしの変貌

- 檜次郎が生まれ育った鶴橋・猪飼野周辺の風景を記録し始めたのは、ちょうど今から100年ほど前のこと。
- 「大大阪」の開発の足音とともに、慣れ親しんできた田園風景が、長屋と工場が建ち並ぶまちへと変貌を遂げようとするとき。
- 現在は暗渠の猫間川や、川筋を変えた平野川の旧の姿がまだ見られ、西に上町台地、東は遙か生駒山の麓を見渡せるまでに沃野が広がっていた。
- 日常の風景が刻々と近代化していく様子を、檜次郎のまなざしと、その時代に育った地域の方々の思い出を重ねて、たどっていくことができる。

## 「平野川 東成郡鶴橋町の北端(三枚橋)」〈大正4(1915)年〉

一面に広がる田んぼのなかを流れる旧平野川。そこに板を3枚組み合わせた橋が架けられています。左端の家屋は玉造駅近くにあった二軒茶屋と記されています。その後の耕地整理で、あたりは一気に市街化していきました。

## 「亀の橋(平野川)」〈大正13(1924)年〉

画家として世に出た頃、櫛次郎はこの橋の付近に住んでいたそうです。このあたりから北東に流れていた旧平野川に架かっていた亀の橋。行き交う人々の様子に、当時の暮らしがうかがえます。現在、親柱だけ民家の脇に遺されています。

## 「猫間川」〈昭和7(1932)年〉

現在は暗渠になっている猫間川の川べりで、30代半ばの櫛次郎は印刷屋を営んでいたそうです(中央「名刺はがき」の看板の店)。川の手前には牧場があり、そこから見えた対岸の様子を描いています。

## 「平野川 鶴之橋一丁目」〈大正5(1916)年〉

鶴の橋は猪飼野の旧平野川に架かっていた橋。この絵はそこから100メートルほど北の風景。水際に降りる道があり、きれいな川水で洗い物もできました。

## 「城東線 桃谷駅」〈大正8(1919)年〉

上町台地の東縁と猫間川の間を走っていたこの鉄道線は、当初は私鉄で、国有化された後の明治42(1909)年に城東線と改称されました(現在はJR大阪環状線)。昭和7(1932)年からの工事で順次高架化されていく以前の駅の様子を描いています。

## 「明治41年 その頃の桃山駅(桃谷駅)付近の図」〈明治41(1908)年〉

上町台地の麓を南に走る蒸気機関車。その後方には毘沙門池から細工谷まで、台地東側の様子が描かれています。手前に広がる農村の風景のなかに、北流する猫間川やそこに流れ込む水路、弥栄神社と御幸森天神宮の間を流れる昔の平野川と「つるのはし」も描かれています。

# 堤檜次郎の画業と作品の評価など

【明尾圭造氏(大阪商業大学総合経営学部准教授 ※日本美術史)】

- 風景にとどまらず、その奥にある世界、風や人声、生活臭が描き込まれた独自の世界。
- 写真が一般的でなかった時代にあって、檜次郎の作品は、鶴橋・猪飼野地域周辺の景観を考える上で、類のない歴史資料ともいえる存在。地域を描くなかで、郷土史研究の道に入り、ますます対象を先鋭化していった。
- 「生業を持ちながら、郷土の研究、作画に余念がなかった檜次郎をみていると、如何にも大阪的な画家を想起させる。大正期、博覧会に出品を重ね、様々な賞を受けながら、地域の研究や定点作画に喜びを感じる檜次郎は、もはや展覧会への出品とその評価に一喜一憂する画家ではなかった。自らの生涯をかけて、描く(調査する)対象を定めた檜次郎に人生の潔さを感じるのは私だけであろうか」(『あしたづ』第15号(2013年2月))

上町台地 今昔フォーラム vol.4 Document

文画人・堤檜次郎が描いた “大正期”のフロンティアとは ~絵師を手掛かりに未来への記憶を呼び覚ます

明尾圭造氏(大阪商業大学総合経営学部准教授) 加藤政洋氏(立命館大学文学部准教授) 定村健二氏 小野賢一氏 他 弘 弘 山本博樹 (CEL)

明尾圭造氏(大阪商業大学総合経営学部准教授)のコメントをうかがい、会場からの声も交えながら、クロス・トークを展開しました。

■ 堤檜次郎とは、どんな画家だったのか

分があります。例えば、公的施設で地元商賈の献金を受けようとしても、その賞賛を受けて「何人、人が来るのか」と費用対効果で判断され、結局実現しない。北野村は、大正期以前には著名な人ですが、この人は大正期、ちょうど天王寺の美術協会の設立時に、こんな提案をします。まず、誰が知っている大きな賞賛はないといけない。ただもう一つ、大阪市内で顕著している若手の作家も含めてそれを顕彰する展覧会もやってみよう。にもかかわらず、当時の大阪商賈の献金は、その北野村の展覧会には、そのうちで使われたことがない。同様に、明治30年代の展覧会も企画ではなかったことはい。

むろん、当時から大阪には、東京、京都に匹敵するような商賈の集積がありまして、明治30(1884)年に浪華学校ができて、明治39(1906)年に「大阪絵画商會」もつくれました。大正元(1912)年組織の「大正美術会」には、北野村、野田元、有楽、上島、山本、水田、竹の

名が上がり、堤檜次郎さんの画展の大阪昇平時代も加わっています。しかし、こうした働きが、堤が一度退社して大阪の美術界を盛り立てていく方向にはなかなか向かない。もしもこの段階で、もう少し京都や東京のように働いていたら、大阪の美術界も多少違った状況になっただけかもしれません。きっと、堤さんたちが弟子さんたちの仕事もつとめたでしょう。さらに決定的要因は、京都と東京があった立地。国立の美術学校が大阪になかったこと、これは前掲と弟子の連続性がない。

それでは大阪には美術市場もあり、そこでは百貨店の存在が大きかった。なかでも高島屋の美術部ひとつのスターターでした。美術部部長は、その高島屋美術部で所属していたという。そう言う意味で、前掲について自分の結果を述べていた。しかし、展覧会の出品者を制作するとなると、日本画は商賈が非常に多かった。また、ある団体に属すと、画匠の推薦・推薦をもらうと、上下のつながりがなかなか通らないこともあったでしょう。一節書いてはいい。

実際、北野村の文章に、研究所を持ち、前掲を醸成するのは非常に責任を有することだと書いてある。若い人は、自分が絵がうまいので、これを食べると思ってよう。たまたま認められても、自分には絵があるというところで、方角違いにずれい

# 堤権次郎の画業と作品の評価など

## 【加藤政洋氏(立命館大学文学部教授 ※社会・歴史地理学)】

- 権次郎さんがすばらしいのは、描いた場所をきちんと特定してあること。どの場所をどの方向からみたかが書き添えてある。記録の意味を込めた絵であること。
- なおかつ、その社会的、歴史的背景が、小野賢一さんたちの研究によってしっかり位置づけられている。
- さらに「上町台地 今昔タイムズ」第4号では、古老たちへの取材により、その当時の記録、記憶が盛り込まれている。大阪の都市の広がりをごうした絵の中から読み取っていくような試みは、いろんな可能性を持つことを今、強く感じている。

上町台地 今昔フォーラムvol.4(2015年9月12日)より

く者が多く、世の中に対して申し訳ない、できれば、自分の画業をよく考えて、公務員になる、あるいは自分で仕事をもつというふうにも動揺してはくれたらいいのだが、なかなかいいゆんのがこの世界だ。

自らの道を選んだ堤権次郎さん

堤権次郎さんは、どの時点かで、自分の生きていく道を大きく変えられた。印刷業で生計を立てつつ、自分の画業は続けていた。

ちょうどその時期、大正時代になると、日本中で地域が重要になっていきます。それに対して危機感を感じ、自分たちの郷土はどういうところかを研究していく機運が生まれてきます。大阪では、足立も関係していた郷土研究「上方」が生まれました。例えば大軌鉄道が通る、香櫛園との関係で地域がどんどん変化します。平野川も付け替えられる。こうした変化に対して、郷土

に対する感情が呼び起こされていきます。大阪郊外の磨劔野・鶴橋でも、ちょっと前までは農園工場があり、布を川で洗っている、日常生活でお米も研いでいたところか、もうメンタスが働いている。でも、前かがだった頃の川を知っているならば、やはりそこに危機意識をもつ人も出てきます。

これは江戸時代から言えることで、「郷土名所図会」「河内名所図会」「和泉名所図会」といったものも、その時点で、商家の目で見ると、これは必要だとするところが描かれ残されてきた。そのおかげで我々は当時のことをかかみかかみ知ることが出来る。こういった系譜の中で堤権次郎さんは自分が住み暮らしている地域のことを作品にして残していったわけです。では、こうした絵と写真とは、いったいどこが違うのか。それは、写真は全体をシャープに写すが、絵の場合は絵く画家

にとり、ここが重要だと感じるところがデフォルメされているということ、そこを中心にして書き切っている画家の視線を我々はあとで追うことができる。そういう意味で、堤さんが「ここは」と思っているところを一緒に確認していく作業はたいへんにおもしろい。小野さんは一歩足を踏み入れて、もう抜けられなくなっている(笑)。

昨日、京都である吉本屋さんへ行きまして、デッサン帳17、8冊を含む一期ほどの資料が出ていたのですが、それは広島島の画家が描いた明治末から昭和初期にかけてのものでした。貴重な資料がもう一つ潰れて出てくる。堤権次郎さんの場合は、堤権次郎さんが守ってくださり、それに小野さんがたどりついた。このあたりがたゞ連続がない地域に資料が残らない。こういうことも含めて、今回は、我々が地域やらなくともいかなことは何かをさせるために良い機会になっていると思います。

### ■ 拡大する大阪市街域と水辺の風景の変貌



加藤 堤権次郎さんの絵について話す前に、まず大阪において、水辺なものがないと捉えられてきたのかを少し広い視野から見ていきたいと思います。

岩波書店の『大阪は水の都』(1994年)。また、大阪城天守閣の前面に「おおさか水辺の風景」が占められていた。これは近代都市大阪の形成に重要な意味を持っていた。川をたどってはいけぬ必死に行き着く。築港方面に開いてはたかさんの写真が撮られていた。

### 都市の無意識を映し出す水辺の風景

まず古い写真集から、昭和31(1956年)出版の『アサヒ写真ブック』は、表紙に水の中島周辺を載せることにより、大阪が水の都であることを明示しています。次に昭和30年代の写真を中心にしたのが



ます、これが大正から昭和初期にかけての大阪近郊の川とつづきの絵。同じ時期のもう一枚を見ても、この辺では土地区画整理事業がまだなされていない状況ですが、すでに感じています。



### 堤権次郎さんが戦後に描いた、大坂の水辺の風景



…人がつくるまちや村も、時間軸を持って眺めてみれば、成長と衰退を繰り返していく、生命体のようなもの。そのような存在であることを前提に、都市の将来を考えていかなければならないのだと、戦災を超えて残されてきた貴重な作品や資料、証言の数々が語りかけてくれる。同時に、目を向けるべき豊かなフィールドが目の前に広がっていることにも気づかせてくれる。…

## IV: おわりに

未来への記憶を呼び覚ます

# 100年前から100年後を見つめる

- 人口減少にともない、社会の変革が求められる今日、都市の在り方もまた再考を迫られている。
- 高度経済成長期に一般化した職住分離の時代から、再び住まいと商い、人と人、人とまちの関係の在り方を組み立て直していく時代を迎えている。
- 都市の中心部と周縁部の役割をダイナミックに再構築していくこと、あるいはその関係性を有機的重層的に編んでいくことなど、縮退する都市の活路を開く可能性を探ることに意味がある。
- 上町台地をとりまく水辺から、大阪を捉え直す、堤梢次郎の100年前のまなざしは、時を貫いて、未来に向けられている。

ホームページで「上町台地 今昔タイムズ」をはじめ、  
U-CoRoプロジェクトのコンテンツをご覧ください

「大阪ガスCEL」×「U-CoRo」で検索ください

<http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html>

ご清聴ありがとうございました